

第5章

「英語力」と「日常の英語使用に関する意識」の比較研究(日本・韓国)

～そこから読み取れる日本の英語教育改善への示唆

昭和女子大学教授 緑川日出子

1. はじめに

本章の狙いは、日韓の高校生の英語力比較によって得られた結果から両国の英語教育において何がみえるかについて検討を加え、そこから日本が目指すべき英語教育改善についての手掛かりを得ようとするものである。「東アジア高校英語教育GTEC調査2006」では、GTEC for STUDENTSを用いて測定した日韓高校生の英語コミュニケーション能力調査の他に、日韓の高校生の英語圏への渡航経験、英語圏での英語使用経験、国内(日常)での英語使用経験についてアンケート調査を行った。さらに、日韓の高校英語教員の指導理念、授業の方針や配慮事項についてもアンケート調査を行って、生徒と教員の両面から両国の英語教育の実態を比較できるようにした。日本も韓国も、英語を主要な外国語として、コミュニケーション能力の育成を狙いとした英語教育への取り組みを行っている点では極めて似通っている。また、どちらの国も英語を母国語とする国々とは地理的に離れていて、英語教育は学校教育を中心に進められている点も共通である。

ここでは、日韓の高校英語教員の英語教授における指導理念、授業の方針や配慮事項、また、高校生の英語圏への渡航経験や英語圏および日常での英語使用経験の中から、特に大きな差がみられた両国の高校生の英語力と日常的な英語使用経験についての調査結果を以下にまとめることにする。なお、結果の解釈にあたっては、既存の資料を参照する他に、特に本調査結果の分析にあたり金泰勲氏が提供して下さった情報についても最新情報として加えてある*1。

2. 日韓の高校生の英語力比較の研究報告

1) 研究方法

(1) 調査対象と学校の特徴

本研究に協力してくれたのは、日本の高校1年生、2年生合計3,700人と韓国の高校1年生、

*1 金泰勲氏への聞き取り調査結果の詳細は、資料編p.106参照。

2年生合計4,019人である。日本と韓国では総数、各学年の人数が若干異なり、高校1年生では日本がやや多く、2年生では韓国が若干多くなっている。しかし、対象となる学校の選択にあたっては、可能な限り平均的な結果が得られるように両国共に中堅進学校の協力を得た。その結果、国内では北海道、山形県、埼玉県、千葉県、岐阜県、兵庫県、鹿児島県の10校、韓国はソウル特別市と慶尚北道（浦項市）の5校となった。表5-1は両国の調査対象の生徒数を示したものである。

表5-1 調査対象

(人)

	高1	高2	合計
日本	2,205	1,495	3,700
韓国	2,042	1,977	4,019

(2) 英語力測定の道具と分析の方法

英語力の測定にはGTEC for STUDENTSを用いた。2003年に行った「東アジア高校英語教育調査」にもGTEC for STUDENTSを用いており、単年度の分析だけでなく経年比較も可能になっている。テストは、トータルスコアとリーディング、リスニング、ライティングのスコアとグレードを用いて、それぞれの分布を調べる道具とした*2。

2) テスト結果の報告

(1) トータル、リーディング、リスニング、ライティングスコアの比較

表5-2は日本、韓国のGTEC for STUDENTSのトータルおよび3技能（リーディング、リスニング、ライティング）のスコア平均と標準偏差を示したものである。

表5-2 英語コミュニケーション能力調査結果

(GTEC for STUDENTSの平均スコアと標準偏差)

	リーディング (320点満点)		リスニング (320点満点)		ライティング (160点満点)		トータル (800点満点)	
	平均スコア (点)	標準偏差	平均スコア (点)	標準偏差	平均スコア (点)	標準偏差	平均スコア (点)	標準偏差
日本 (n=3,700)	153.2	39.7	163.7	41.4	91.4	17.2	408.3	84.9
韓国 (n=4,019)	205.5	53.2	187.6	49.3	66.5	32.3	459.6	121.5

※本調査では、日本と韓国で受検したGTEC for STUDENTSのテスト実施回、出題内容が特にライティングにおいて異なっている。このため、表中の日本のライティング・スコアは韓国のテスト実施回との比較用に換算したスコアを表示している。

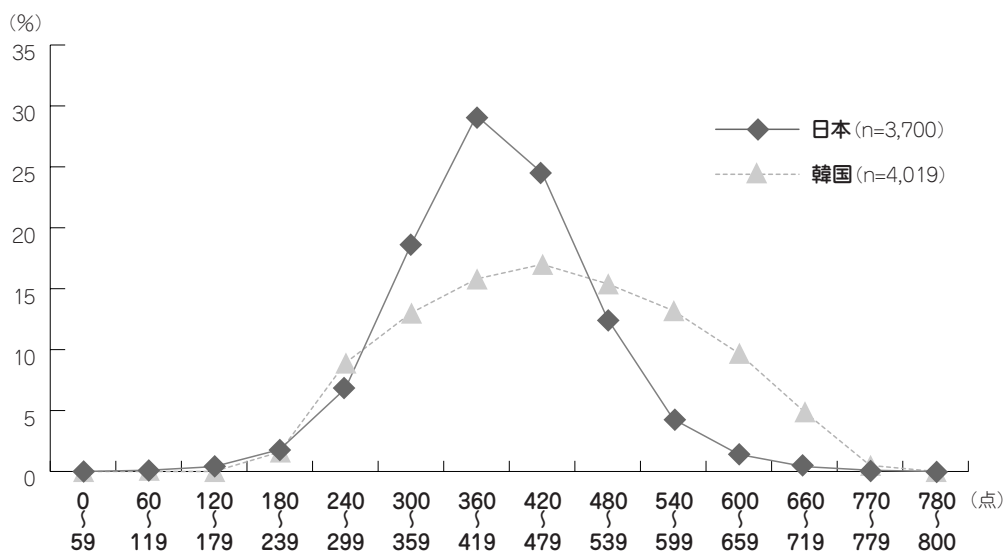
*2 GTEC for STUDENTSのスコア・グレードの詳細は、資料編p.153参照。

日本と韓国の高校生

表5-2の英語力の平均スコアは、2学年を合わせた総計で、日本が408.3点、韓国は459.6点となった。この数値は、どちらの場合も日本の高校2年生の総受検者平均点399点*3を上回っており、調査に協力してくれた高等学校が中堅進学校であることを裏付けるものである。しかし、韓国の平均点は日本の高校3年生の平均453点を超えており、韓国の中堅進学校では、日本の高校3年生の平均的英語力を有していると推定できる。リーディングの平均スコアは、日本は153.2点、韓国は205.5点で、グレードで比較した場合は、日本がグレード3の上限に近く、韓国はグレード5の中程度よりやや低いことがわかる。ここから、リーディングでは、韓国が日本をはるかに上回っていると言える。リスニングの平均スコアは、日本が163.7点、韓国が187.6点である。この得点をグレードにあてはめると、日本はグレード3、韓国はグレード4で、韓国が1グレード上回っているが、リーディングより差は小さいことになる。ライティングの平均スコアは、日本が91.4点、韓国は66.5点、日本のグレードは3、韓国は2で、日本が韓国を上回っていることになる。

次に図5-1、図5-2、図5-3、図5-4は、トータルおよび3技能（リーディング、リスニング、ライティング）における日韓のスコア分布を折れ線グラフによって比較したものである。

図5-1 トータルスコア分布（日本・韓国）



*3 GTEC for STUDENTS受検者の累積データ(1998年度～2006年度)から算出。

図5-1は日韓のトータルスコアのスコア別頻度比較である。日本の高校生では、トータルスコアの2分の1、すなわち400点前後に大半が集中している。一方、韓国の場合は、ほぼ正規分布に近い形で得点群が分散している。また、特に上位2分の1の得点群の分布は、両国では極端な差があり、トータルスコアの分布によっても韓国は全体的に日本よりも上位層の頻度が高いことがわかる。

図5-2 リーディングスコア分布(日本・韓国)

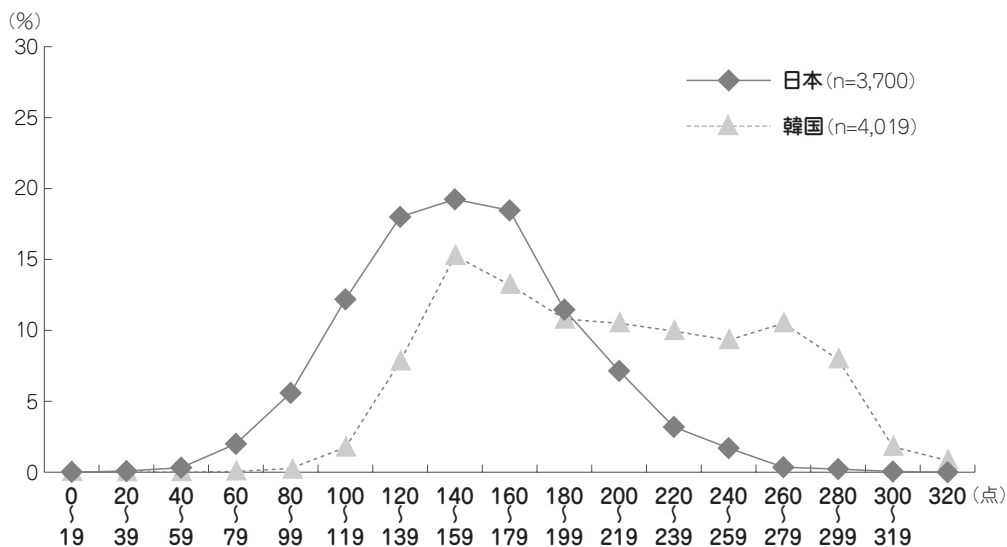


図5-2はリーディングスコアの日韓比較である。このグラフの特徴は、日本は140～150点台を頂点として大半がその付近に集まっているが、各得点群がほぼ正規分布に近い形で分布している。しかし、韓国では二つの山があり、一つ目の山で頂点に達しているのは140～150点付近で、二つ目の山の頂点は260～270点台である。しかも200点から299点までに50%ほどの分布が集まっており、結果的には平均点205.5点ということになる。また、得点下位群の分布が日本に比べて少ないのも特徴的である。

日本と韓国の高校生

図5-3 リスニングスコア分布(日本・韓国)

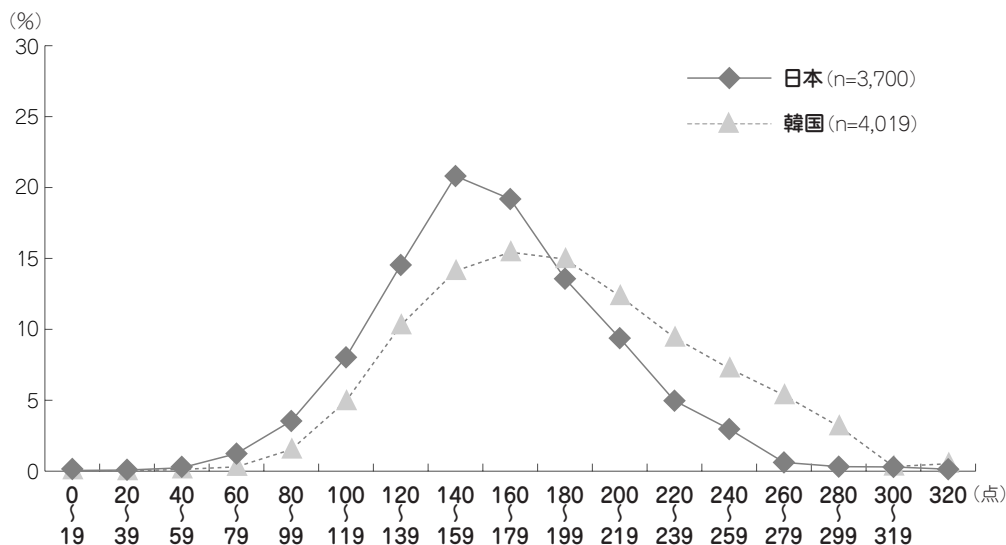


図5-3は、リスニングスコアの日韓比較である。先に述べたとおり、日本は平均値163.7点付近に分布が集中していることがわかる。韓国では160～170点台を頂点として頂点付近に分布が集中しており、さらに得点群が上位層に分布している。

図5-4 ライティングスコア分布(日本・韓国)

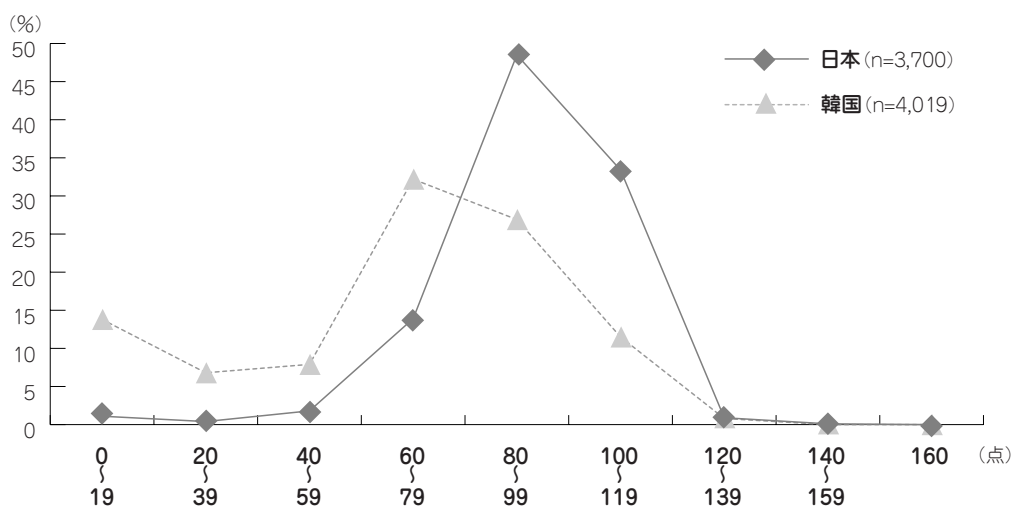


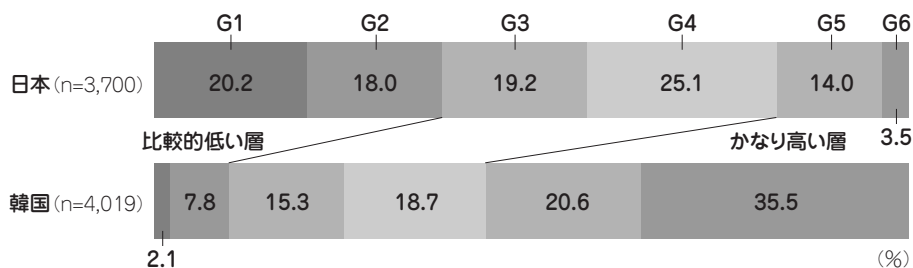
図5-4によって、ライティングスコアの日韓比較では日本が韓国に比べて中位層を中心に上位層にまで分布が広がっているのが明らかである。100点付近に3分の1が集中し、その前後にも分布が集中している。下位層である60～70点台以下のボリュームは小さく、上

位層も120点台がわずかにいる程度であるから、日本の高校生は、全体としてライティングの力は中位層に集中していると考えられるであろう。それに比べて韓国の場合は、頂点が60～70点台でそこから90点台までに分布が集中、下位層の分布も日本に比べて際立って多いと言える。上位層も120点台以上はごく僅かである。したがってライティングの力については日本が韓国を上回っていることがわかる。

(2) リーディング、リスニング、ライティングのグレードによる比較

次に、**図5-5**、**図5-6**、**図5-7**は、日韓のリーディング、リスニング、ライティングスコアをGTEC for STUDENTSのグレードに当てはめてグレード別に比較したものである。帯グラフの中に示されている数値は各グレードが占める受検者のパーセンテージである。ここでは、日韓のグレード別分布の特徴を掴むために、グレード1と2を合わせて、便宜的にこれを「比較的低い層」と名付け、5と6を合わせて「かなり高い層」と名付けて、3技能について2つの層の比較を行った。

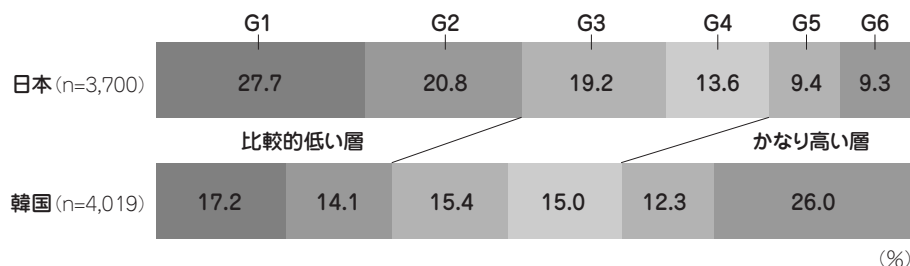
図5-5 リーディング・グレードの割合(日本・韓国)



その結果、リーディングでは、日本の場合、比較的低い層は38.2%、韓国は9.9%であった。かなり高い層については、日本は17.5%、韓国が56.1%だということがわかる。ここから、リーディングのグレードは、韓国は比較的低い層がかなり少なく、さらに半数以上の生徒は既にかかなり高いグレードの層に達していることが明らかになった(**図5-5**)。

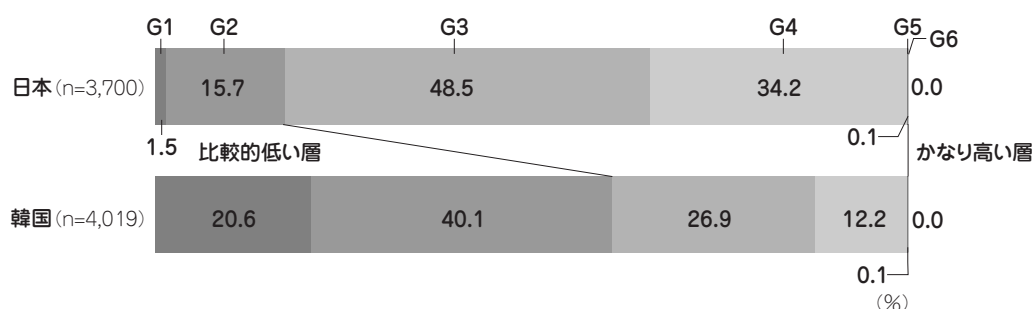
日本と韓国の高校生

図5-6 リスニング・グレードの割合（日本・韓国）



リスニングは、比較的低い層に属する生徒の割合は、日本では48.5%、韓国では31.3%、かなり高い層に属する生徒の割合は、日本では18.7%、韓国では38.3%であることがわかる。これによって、日本では約半数の生徒が比較的低い層に属し、韓国にはこの層に属する生徒も3分の1程度はいるが、38.3%にもおよぶ生徒が既にかなり高い層に属していて、リスニング・グレードにおいても韓国の高校生が日本の高校生を上回っていることが明らかである(図5-6)。

図5-7 ライティング・グレードの割合（日本・韓国）



ライティングでは、日本では比較的低い層は17.2%であるのに対して韓国では、60.7%であることから、ライティングのグレードは日本が韓国に比べて高いということがわかる。このことは、日本のグレード3と4を合わせると82.7%、これに比べて韓国は39.1%にとどまっていることからわかる(図5-7)。

3) 考察

前述の結果から、日本と韓国の高校生の英語力は、総合的には韓国の高校生が日本の高校生よりかなり高いと言える。これをスキル別に調べると、特にリーディング力では韓国が非常に高く、ライティング力では日本が韓国に比べて高いことが判明している。しかし、韓国の高校生はリスニング力においても日本の高校生より高く、さらにリーディング力が非常

に高いので、総合力では、韓国の高校生は日本の高校生より到達度が高いという結果になる。

そこで、なぜこのような差が生じているか、その原因を探ってみよう。かつて筆者は、韓国の高校生の英語力が高いことは、TOEFLの平均点で高等学校の生徒が最も高い得点であることをみてもわかると指摘した(緑川、2000)。韓国の高校生の英語力が日本の高校生のそれを上回っていることは、本調査によっても明らかになった。また、2003年度に実施した『東アジア高校英語教育調査』(2004)によっても、総合得点は日本が平均407.8点、韓国は414.1点で、韓国が日本より若干上回っていた。2003年度調査で調査対象となった韓国の高校生が小学校段階では、英語教育が開始されていなかった。しかし、2006年度調査の調査対象となった高校生は、小学校3年時より学校で英語を学んでいる。韓国の小学校ではスピーキング・リスニングの英語授業が中心になり、中学校では4技能の指導が本格的に始まる。したがって、今回の調査であらわれた日本と韓国の高校生の英語力の差異が、小学校の英語学習に関係があるかもしれないとおおまかに推察できる。小学校でどのような指導が行われているかは別としても、小学校でのカリキュラムの中で教科として英語を学んだ韓国の高校生と中学校で英語を学びはじめた日本の高校生では、学校における学習量に差異が生じている点は明らかなことである。また、学校における学習量については、中学校、高等学校においても両国に大きな差異があることは、以下で紹介する他の研究データによっても明らかである。

東アジアの中・高等学校の英語検定教科書の比較研究を行っている小池科研研究グループで、コーパスを用いてテキスト比較した投野は、韓国の中学校教科書の総語数は36,108語(そのうちの異なり語数は2,771語)、日本は10,202語(異なり語数は1,528語)、文章の数では韓国5,077文(うち1文の平均語数は9.61語)、日本は1,445文(うち1文の平均語数は7.96語)と報告している(小池他、2006)。これによって、韓国では、中学校の段階で日本の中学生の3倍以上の量の英語を教室で学び、さらに日本の生徒より長い英文を読んでいることになる。これによっても、語彙や文法構造等を含むすべての学習量の違いが、GTEC for STUDENTSのトータルスコア、並びにリーディングのスコアに影響を与えているのではないかと推測することができるのである。参考までに、小池科研同研究グループの高等学校の教科書比較(小池他、2007)では、韓国の総合本のリーディングのためのテキスト部分で高校2年までに出現する総語数は韓国では13,396語(異なり語数3,943語)、日本では英語I、英語IIで16,252語(異なり語数3,661語)になっている。しかし、韓国では高校3年前期にさら

日本と韓国の高校生

に総語数6,906語(異なり語数2,033語)が必修で加わり、日本の英語I,IIに相当する教科書でのリーディング部分の13,396語を加えると20,302語となり、日本の高校での総語数16,252語よりかなり多い。また、日韓テキストの異なり語数は3,661語と5,976語となり、韓国では日本に比べて高校生に与える語彙サイズがかなり大きいことがわかる。さらに、やや難とする語の出現率(5,000語から10,000語)は日本では平均10%程度であるのに対して、韓国は30%以上である。これらのことから、韓国の学校英語教育の中では、リーディングを通して日本に比べてかなり多量のインプットを与えていること、さらに語彙のみからのデータによってではあるが、質的にも高度な英語を与えていることがわかる。

また、韓国では最終年次終了時に日本のセンター試験にあたる大学修学能力試験を実施しているため、そのために猛烈な受験のための学習があることが知られている。これは、教室内学習はもとより、予備校、家庭教師、ほぼ深夜まで開放されている学校図書室、公共図書館、有料自習室などの教室外学習によって知られるところであり、その実態を金氏も指摘している。このような事情から、韓国の高校生は日本の高校生に比べてかなり多くの時間を教室外英語学習に使っていることは十分推察できることであり、高校生の英語力の違いを英語学習量の違いとしてみても危険はないであろう。韓国の小学校の英語教育の方法論や実態については今後さらに調査を続けて、中学校、高等学校英語教育に与える影響を調べる必要があるが、小学校でリスニングとスピーキングの指導を徹底させて、その基礎の上に中学入門期には日本の中学1年生レベルを超えた英語の指導が始まっており、それが高校まで続くというのが実態である。高校卒業前に大学進学者のすべてが大学修学能力試験を受験するという制度によって、この試験における高得点が高校生の到達目標の指標となっているであろうということは、ライティング力についての考察で明らかになるが、大学修学能力試験がコミュニケーションのための英語力養成に波及効果を与えているであろうことは、GTEC for STUDENTSのトータルスコア、リーディングとリスニングのスコアの高さによって理解できることである。

そこで、最後に残るのは、日本と韓国の間が生じているライティング能力の差の問題である。日本では学習指導要領の中で、中学の段階から「自己表現」をすることを狙いとしており、このために授業活動の中で、または宿題としてまとまった英文を書く機会が与えられている。また、教科書にもこの類の練習問題が含まれ、高校入試問題にも課題作文が含まれることがある。日本では生徒が書いた英文にコメントしたり修正したりする役割にALTが活躍している点も特筆すべきである。日本の学校では、ALTの援助などによって中学校の

段階からライティングの活動が積極的に取り込まれていると考えてよい。一方、韓国では高等学校の段階でもライティングの活動はモデル文の一部に語句を書いたり、1文単位で作文をさせたりする問題が多く、日本のようにまとまった英文を書く機会が少ないということは、韓国の英語教科書をみると明白である。調査協力者の金氏は、韓国の英語教育では、スピーキング・リスニング能力が強調され、ライティング力については指導が十分になされてこなかったこと、そのためにライティング能力が低く問題視されていること、ライティングは大学修学能力試験に出題されているが多肢選択問題のみであると指摘している。英語教科書のライティング練習が大学修学能力試験と関係がありそうであることはここから推察することができる。なお金氏によると、高等学校では、英文日記を宿題として加える活動が最近あらわれていること、ライティングの指導を強化するために教育施策を見直す見直しがあること、さらに大学入試でもライティング・テストの方法は近い将来に変わる予定であるということである。

4) 英語力についてのまとめ

以上によって、コミュニケーション能力育成の英語教育を推進する日本と韓国の高校生の英語力は、総合的にみると韓国が日本を上回っていること、スキル別にみると韓国のリーディング力、日本のライティング力は、それぞれ相手国を上回っており、その原因は、まず学習量と関係があるのではないかと結論した。韓国は日本の学習指導要領を範として英語教育政策を進め、かなり長い年月は日本の後を追う形で英語教育が進められてきた。しかし、1990年代に入って韓国の英語教育に大きな変化が生じ始めた。権(2004, p.77)は、その変化を1997年に始まった「スピーキング重視の小学校英語教育」、コミュニカティブ・シラバスを採用した「第6次、第7次ナショナル・カリキュラム」「ネイティブ・スピーカー教員の導入」、1994年に開始されたリスニングとリーディング重視の「大学修学能力試験」「教員研修」の強化、「パフォーマンス評価」の重視、「英語で行う英語授業」の推進であるとしている。このことは、小泉(2000)、緑川(2000)でも、具体的に説明されている。また韓国の英語教育改善がグローバル時代の国家戦略であることはThe Presidential Commission on Educational Reform(1997)にも詳しくその経緯が記述されている。韓国では、韓国教育課程評価院KICE(Korea Institute of Curriculum and Evaluation)を頂点として、カリキュラム、教科書、テストや学習手段にいたるまで専門家集団が実施の状況をモニターして改善するシステムが機能している(緑川、2000)。本調査の結果は、韓国の

日本と韓国の高校生

「グローバル化に対応した英語力を養う」という英語教育施策の効果が、高校生の英語力にあらわれているとみることができるのではないか。

本研究のテスト結果の信頼性について、金氏は、調査対象校がある地区の特徴を考えると、テスト結果は全国の平均的な状況を反映しているとみてよいと言明している。もし、高校入試が残っている中・小都市の生徒を調査対象にすればさらに平均点が高くなったかもしれないとも述べており、入試がテスト結果に関わっているのではないかということは、金氏のライティング・テスト結果についての指摘からも推察できることである。しかし、GTEC for STUDENTSがコミュニケーション能力を測るテストであることを考えれば、入試が生徒の英語力向上に波及効果を与えているということになる。この点は、大学修学能力試験の問題をみても理解できることである(緑川、2002、2004)。

日本では「英語が使える日本人」育成の教育政策でSELHiプロジェクトや60,000人の公立中・高等学校英語教員の悉皆研修等の新しい試みが始まり、その効果がみえ始めている。しかし、小学校英語教育について言えば、東アジアのほとんどの国で進められているという事実がある。ここでは、小学校に英語を導入すれば英語力が養われると述べているのではないが、韓国が国家戦略として英語教育を推進し、小学校から高等学校までを見通した英語教育施策を開始して10年ほどで、その成果があらわれているということであろう。ここから日本が学ぶためには、今何をどのように改善すればよいかという足元の問題解決だけではなく、現在の小学生、中学生、高校生まだが、日本の社会の実質的な担い手となる頃、すなわち最短は10年程度先をみて日本が置かれている立場や世界の中の日本という点について考え、到達目標、そのために取るべき方法について検討を加えて早急に実施に移す必要があるということである。猛烈な勢いで改革が進んでいる東アジアの英語教育の実態を把握して、優れた点を学び、問題点を改善して日本の英語教育施策に反映させるべき時期が来ているというのが、英語力に関する本稿のまとめである。

3. 日常の英語使用経験についてアンケート調査報告

1) 研究の目的と方法

日常生活の中で英語の使用経験があるか否かを知ることは、英語がコミュニケーションの手段として学ばれるという両国の共通した状況の中で、教室という学習の場を超えて英語がコミュニケーションの手段として、またはその力を養うための手段として利用されているか否かを知るための手掛かりを与えてくれるものである。本調査では、その点に焦点をあて、「日常的に読むこと」「日常的に聞くこと」「日常的に話すこと」「日常的に書くこと」の経験について日韓の違いをみていくものとする。回答者は、既に述べた英語力調査の調査対象となってくれた日韓の高校生である。日本と韓国で異なるアンケート項目のため、共通する項目のみ集計している。日本では、アンケートの回答には、ライカート・スケールによって答えてもらう方法を用いた。以下に1つの質問例を簡略化した形で示すことにする。

質問⑥

「英語の天気予報を聞く」

1. ない
2. 少しある
3. 何度もある

以上のうちから、生徒たちにひとつを選択回答するように求めたが、結果のまとめ方には、2と3を合わせて日常的に少しでも英語使用の経験があるか否かがわかるようにまとめることにした。

韓国では、「学校外の日常生活で英語を使う場面や活動に関する質問」という形で、それぞれの項目について以下のような質問に答えてもらっている。

質問33)

「英語の天気予報」

1. 聞いたことがない
2. 聞いてみて、少しぐらいは理解できるところがある
3. 聞いてみて、大筋は理解できる
4. 聞いてみて、細かい部分まで理解できる

以上のうちから、生徒たちにひとつを選択するように求めている。結果は、2～4を合わせて、経験がある(2～4)か、否か(1)がわかるようにまとめた。

日本と韓国の高校生

2) 結果と考察

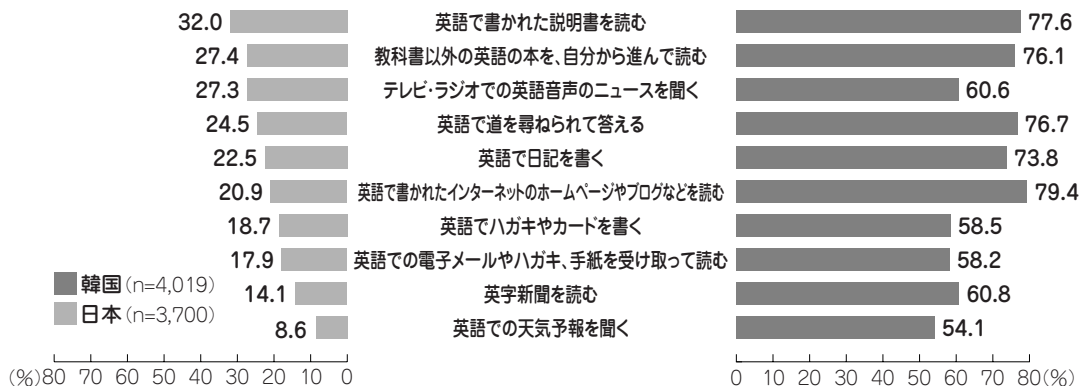
表5-3 日韓高校生の国内での英語使用経験(技能別)

		日本 (n=3,700)	韓国 (n=4,019)
読む	1.英語で書かれた説明書を読む	32.0	77.6
	2.教科書以外の英語の本を、自分から進んで読む	27.4	76.1
	3.英語で書かれたインターネットのホームページやブログなどを読む	20.9	79.4
	4.英語での電子メールやハガキ、手紙を受け取って読む	17.9	58.2
	5.英字新聞を読む	14.1	60.8
聞く	6.テレビ・ラジオでの英語音声のニュースを聞く	27.3	60.6
	7.英語での天気予報を聞く	8.6	54.1
話す	8.英語で道を尋ねられて答える	24.5	76.7
書く	9.英語で日記を書く	22.5	73.8
	10.英語でハガキやカードを書く	18.7	58.5

*韓国では、「学校外の日常生活で英語を使う場面や活動に関する質問」という形でたずねている。また、日本と韓国で異なるアンケート項目のため、共通する項目のみ集計した。

*日本：「(経験がない)」「無答不明」以外の%。韓国：「(買ったことがない、したことがない、等)」「無答不明」以外の%。

図5-8 日韓高校生の国内での英語使用経験



*韓国では、「学校外の日常生活で英語を使う場面や活動に関する質問」という形でたずねている。また、日本と韓国で異なるアンケート項目のため、共通する項目のみ集計した。

*日本：「(経験がない)」「無答不明」以外の%。韓国：「(買ったことがない、したことがない、等)」「無答不明」以外の%。

表5-3、図5-8は、日韓のアンケートで共通する項目について、日本と韓国の高校生のうち「国内における英語使用経験あり」と回答した生徒の割合をパーセントで示したものである。なお、表5-3は項目をスキル別にまとめ、図5-8は日本の高校生の使用経験率が高い順に並べて韓国と対比させたものである。

これらのうち、「日常的に読む」経験、すなわち、英語の説明書、教科書以外の英語の本、ホームページやブログ、電子メールやハガキや手紙、英字新聞を日常的に少しでも読んで

いるという生徒は、韓国では58.2～79.4%おり、英語を読むことは高校生の日常生活の中にかなり入り込んでいるという状況が推察できる。しかし、日本では同じ経験をしている生徒は僅かに14.1～32.0%である。一方、「日常的に聞く」経験、すなわち、英語ニュースや天気予報を聞く経験については、韓国の高校生は60.6%と54.1%と読む経験より若干少ないことがわかった。しかし、日本では27.3%と8.6%であるから、聞くことについても大差がある。「日常的に話す」経験、すなわち、通りで外国人に英語で道を尋ねられて答えるのは、韓国では76.7%、日本では24.5%である。ただし、この場合は場を与えられなければ経験のしようもないので、このことについては別に考えなくてはならない。金氏は、本調査に協力した高等学校がソウルを中心とした都会に位置していることから特に「話すこと」の機会、他の地方の高校生に比べて多いのではないかと分析している。筆者も直感的ではあるが、体験から同様の状況があるのを理解している。東アジアの英語教育実態調査のためアジア諸国を訪れる時には、通りで児童、生徒、学生に道や地域の情報を質問することになっているが、韓国の場合は、ソウルであれば2000年頃から高校生、大学生は英語での応答に積極的であった。それから4年程度で、小学生でも通りで英語の質問に何とか答えるようになってきたが、まだ小学生は自らコミュニケーションができるところまではいっていないようにみえた。しかし、第二の主要都市である釜山では、児童はもとより、中学生でも応答を断る生徒が多くみられた。ソウルに比べて外国人が少なく、話す機会に恵まれていないという状況と、そのためかコミュニケーションを目的とした英語教育の普及がソウルに比べて遅れているのではないかと解釈できそうである。最後に「日常的に書く」経験すなわち、英文日記やハガキやカードを書くことは、韓国では73.8%と58.5%、日本では22.5%と18.7%という割合である。ライティング能力では、韓国の高校生の力は日本の高校生の力にはるかにおよんでいないことがわかったが、韓国の高校生は、日本の高校生より日常生活の中で英語を書くことを行っているという意識を持っているということがわかった。

3) 日常の英語使用経験についてのアンケート調査のまとめ

以上のとおり、スキルのどの分野についても、韓国の高校生は、自己申告ではあるが、日本の高校生に比べて日常生活の中で英語の使用経験をはるかに多く持っているということになる。韓国も日本も他のアジア諸国とは異なり、市中に英語が溢れているという環境ではない。にもかかわらず、日常的に英語を読み、書き、聞く経験が日本の高校生に比べてはるかに多いということの理由の一つとしては、韓国におけるインターネットやケーブル

日本と韓国の高校生

テレビの高い普及率が考えられる。OECDの統計(OECD、2007)によれば、2000年から2004年までの間、韓国におけるブロードバンドのインターネット普及率は、世界で第1位であった。2006年には第4位に落ちたが依然として普及率は際立っており、2006年の時点で第1位のデンマーク31.9%と韓国の差は僅かに2.8%であった。また、YTN(2004)によれば2004年上半期の韓国のケーブルテレビ普及率は、1,698万世帯中の69.0%に及んでいることも明らかになっている。インターネットによる英語へのアクセスはもちろんのこと、テレビで日常的に英語番組に接することが可能な韓国の高校生が、日本の高校生より、日常生活の中で英語に接触する可能性が高いことは、これらの統計からも納得できることである。

韓国はグローバル化と国家戦略としての英語教育の推進のため、既に記述したKICE中心の英語教育施策を進めており、一方では英語使用の能力が個人の利益に影響を与えるという状況まで生じている。金氏から韓国人は絶対に英語を学ばなければならないという意識が強いという指摘があったが、その根底には英語学習が国家や個人の利益に通じるという韓国社会の時代的要求があるものと判断できる。高校生の英語の使用経験についても、彼らを取り巻く社会のニーズを反映しているものだと考えることができるであろう。

日本は現在、英語力の到達目標を「英語が使える日本人」育成と掲げているが、具体的にその実をあげるためにどうすればよいかについて、本腰を入れた国家的施策のようなものが、まだみえてきていない。ゆえにそれが日本の高校生の日常生活の中における希薄な英語使用経験意識にもあらわれているということではないだろうか。この調査では、グローバル化の中で、日本が今後どう生きようとしているのか改めて考えさせられる結果を提供されたことになる。

<参考文献>

- The Presidential Commission on Educational Reform. 1997. *Education for the 21st Century: To ensure Leadership in the Information and Globalization Era*. The Republic of Korea.
- ベネッセコーポレーション編 (2004) 『東アジア高校英語教育調査：指導と成果の検証』(株)ベネッセコーポレーション
- 小泉 仁 (2000) 「韓国第7次教育課程に見る英語教育」『英語教育展望』107. ELEC
- 緑川日出子 (2000) 「韓国の英語教育視察レポート」『英語教育展望』107. ELEC
- 緑川日出子 (2002) 「韓国大学修学能力試験概観」『Unicorn Journal』53. 文英堂
- 緑川日出子 (2004) 「韓国の大学入試に学ぶ：リスニングテストの最新情報」『Unicorn Journal』58. 文英堂
- 権 五良 (Oryang Kwon) (2004) 「韓国の教育事情の観点から見た韓中日英語力調査結果の解析と考察」ベネッセコーポレーション編『東アジア高校英語教育調査：指導と成果の検証』(株)ベネッセコーポレーション
- 小池・相川・尾関・投野・緑川 (小池科研、東アジア中・高等学校検定教科書比較調査研究班) (2006) 「東アジアの中学校英語検定教科書の比較研究」Asia TEFL 福岡大会 シンポジウム (「第二言語習得研究を基盤とする小、中、高、大の連携をはかる英語教育の先導的基礎研究」基盤研究[A] 研究課題番号16202010)
- 小池・相川・尾関・投野・緑川 (小池科研、東アジア中・高等学校英語検定教科書比較研究班) (2007) 「東アジアの高等学校英語検定教科書の比較研究」Asia TEFL クアラルンプール大会 シンポジウム (「第二言語習得研究を基盤とする小、中、高、大の連携をはかる英語教育の先導的基礎研究」基盤研究[A] 研究課題番号16202010)
- OECD (2007) 「2006年ブロードバンドインターネット統計」(2007年4月25日発表)
- YTN (2004) YTN (Yonhap Television News, 2004年9月20日放送)